

世界の九カ国に三十五人を派遣

海外留学僧派遣育英会第六回総会開く

派遣僧の論文集発行

海外留学僧派遣育英会の第六回総会が十一月二十三日午後二時半から、善光寺で開催された。同育英会は昭和五十九年一月、理事長である善光寺の黒田住職が善光寺開創十五周年の報恩行として設立したもので、八年目を迎える今日までに世界九カ国に合計三十五人の育英生を派遣し、国際社会に目を開く人材の育成を図ってきた。総会には役員や育英生、関係者ら約三十人が出席し、論文集の出版や新年度行事計画等について報告が行なわれた。

総会に先立って本堂「釈迦殿」で黒田理事長の導師により本尊上供が営まれ、続いて東隆眞理事（駒沢女子短期大学副学長）が「善光寺育英会の夢」と題して記念講演を行なった。その中で東理事は、これまでに育英生が提出した論文を集大成した論文集が刊行されること、また七月、韓国の名刹・通度寺の求めに応じて袈裟と『正法眼蔵』を贈り、袈裟の心を通じて袈裟興隆と平和祈願に寄与したことを報告し、「日韓仏教史に新しい意義をとどめるもの」と評価し

た。

東理事は育英会のビジョンについて日頃考えていることを語り、この育英会の性格・特色は善光寺の黒田住職の僧侶としての誓願と学問・修行などの経歴、さらには任職としての活躍と一体のものであるとし、駒沢大学大学院を経て雲水修行に入り、上座部仏教の僧としての修行体験をもち、アメリカの禅センターで海外布教にも努力した黒田住職の活躍ぶりを讃えた。

さらに東理事は、黒田住職が善光寺を創建し、外国人を含む二十人を超す弟子を養成、子息を上座部仏教で得度させるなど、斬新で自由な発想をもち、決断力と実行力をもった先駆者的存在であることへの敬意の念を表明した。

その上で、善光寺育英会の目指すところが仏教興隆と世界平和の実現にあることを強調し、この会が十年、二十年、三十年と年数を重ね、育英生を五十人、百人と輩出していくことがそ



のための大きな力となるとの確信を披瀝。「後ろ向きで観念的な仏教研究はやめて、もつと前向きな姿勢で仏教を学んでいかなない限り、仏教に明日はない」と訴えた。

記念撮影の後、客殿で總會に移った。はじめに佐藤俊明常務理事が挨拶し、「育英会が発足して八年目、第一回生を送ってから七年、昭和六十一年に第一回總會を開いてから六回目の總會となった。物事を継続するのは至難の業だが、石の上にも三年を二度繰り返した会だから基礎は盤石と思う。育英生の方々の日常の精進と活躍が、これから留学を望む方々の身近な参考となるので、いい手本をお示しいただきたい。同じことを三十年間続けて初めて世間も納得する道に到達できる。どうか一筋の道を歩むよう、決意を固めていただきたい」と励ました。

来賓としてニューヨーク・ニュージャーシー港湾局アジア太平洋地区支所の南西アジア貿易

代表である坂井司氏、また育英会参与の東方学院講師・阿部慈園氏が挨拶し、議長に宮本延雄理事（鶴見大学歯学部事務部長）を選出して議事に入った。

新年度行事計画の中で、善光寺育英会の論文集が中外日報社の編集・印刷により十二月八日の成道会を期して発刊することが報告された。また育英生の一人であるフランス人の尼僧、バシユール・ルース・浄心さんが南フランスに禅堂を開き、来年六月に開単式が挙行されるため、黒田理事長らが参列することや、新しく推戴した顧問の人事が発表され、黒田理事長が日本パクナム会の会長に就任したこと、育英会の英文化名の変更などについても報告された。

坂井氏はとくに、インド大菩提会の招きにより福井県小浜の発心寺専門僧堂・原田雪溪堂長が一月下旬から二月にかけてインドを訪問し、坐禅講習会の指導を行なうことを発表した。こ

れは、日本の禪に強い関心を抱く大菩提会のサ
ンガセーナ会長の依頼を受けて、坂井氏が善光
寺の黒田住職に相談したところ、黒田住職が全
面的な協力を約束したことから実現することに

総会挨拶

本日、第六回総会が開かれますことは、まこ
とに意義深く、よろこびに耐えないところであ
ります。

善光寺海外留学僧派遣育英会が発足して八
年、留学僧を海外に送り出してから七年、そし
て第一回生が帰国してきた昭和六十一年八月に
第一回総会を開いて以来、毎年回を重ねて今回
第六回を迎えました。

「石の上にも三年」といいますように、続け

なったもので、坂井氏はインドで禪を挙揚する
機縁として重要な意味を持つことの喜びを語つ
た。

海外留学僧派遣育英会
常務理事 佐藤 俊 明

ることは容易なことではなく、三年が最小の目
やすで、三年続かないようではお話にならず、
三年以上の継続によって事は成就するのであり
ます。その三年を二度繰り返し返したことは、善光
寺海外留学僧派遣育英会の基礎が磐石なものに
なった証拠であり、今後の発展が期待できると
ころまで来たを受け止めてよいかと思えます。

この七年間に、インド・スリランカ・タイ・
韓国・アメリカ・イギリス・フランス・ヨーロ

ツパの八カ国へ、まず中国・韓国及びフランスより日本留学と、計九カ国に三十五名の方方を送っております。

昭和六十二年を振り出しに、私は理事長の同伴をして皆様方の過ごされた国国、寺寺に足をはこび、皆様方の御精進のあとを偲んでまいりましたが、留学を終えられた皆様方がそれぞれの分野において素晴らしい御活躍をしておりますので、^ゞさすがは^ノと頼母しく、今後に大きく夢がふくらんでまいりました。折も折、第四回生のバシユー・ルース浄信さんが目下南フランスに禅堂を建てておられますが、来年六月に開堂のはこびなのでそのセレモニーにぜひ来仏願いたいという通知をいただいております。「桃栗三年、柿八年」といわれますが、育英会のタネが蒔かれて八年にして柿の実が遠い国フランスに結実したことはまことにうれしいこととであります。また今年、皆様方の応募論文

集が発行になります。実は本日お渡しできるようにと作業を督促してまいりましたが、残念ながら間に合いませんでした。出来次第お送りいたしますので、いましばらくお待ち願います。

これは今後善光寺海外留学僧に応募しようとする人たちに対するもつとも手近かな参考資料として価値あるものと思えますので、この皆様方もお心にとどめおかれ、活用をはかっていたきたいのであります。実はそれよりもつと参考になるのは皆様方の日常の御精進御活躍でありますから今後一層、活きたいお手本を示してくださるようお願いいたします。

さきに「石の上にも三年」と申しましたが、三年続けられれば十年続けられるものです。十年続けられれば三十年続けられます。「この道三十年」といわれますように、三十年続けなくては達人とはいわれません。禅門ではよく「更に三十年行脚し来たれ」「坐ることわずかに三十

年」などといひます。三十年の間、倦まず弛ま
ず精進を続けてこそ、日に新たに、日に日に新
たなる成長発展が約束されるのであります。

『永平広録』に「花開必結真実 青葉逢秋即
紅」という対句があります。心の花が咲けば、
つまり菩提心を起せば必ず仏果菩提が結ばれ

第八回生決定

去る二月八日、第八回善光寺海外派遣留学僧
として五名採用、また継続二名を左記のとおり
決定いたしました。尚今年度は日韓交流の年に
いたし度く韓国の方々を主に採用いたしまし
た。なお、李俊秀師と落合隆師の継続が認めら
れました。

る。その相互関係は、青葉が秋になると紅葉す
るように、時節因縁がそのように運んでくれる
というのでありますから、それこれ思い煩らう
ことなく、ただ一筋に今後一層の御精進を願
いして挨拶いたします。

派遣先	宗派	氏名	国籍
カンボジア	真言宗	洪井修	日本
日本	曹洞宗	ペルク・ローフ大玄	米国
日本	立正大学大学院	韓仁徹	韓国
日本	大正大学	韓京愛	韓国
日本	東北大学	権来順	韓国
継続	曹洞宗	落合隆	日本
タイ	ワットパクナム	李俊秀	韓国
日本	東洋大学	李俊秀	韓国

第九回海外留学僧募集について

目的

大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先

世界各地

派遣期間

一年間とするも場合により延長するも可

給費

派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員

2～3名

提出書類

- | | |
|-----------|----------------|
| (1) 論文 | (2) 保証人と連署した願書 |
| (3) 卒業証明書 | (4) 履歴書 |
| (5) 推薦書 | (6) 健康診断書 |

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割

● 二一世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと

● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

原稿不切 平成四年十二月十日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局